昭和50年10月

最近の東南アジアの動向と中ソ

目次

〈報　告〉

最近の東南アジアの動向と中ソ

一　噴出する地域問題……1
二　対中国政策……3
①シンガポール……3
②マレーシア……4
③タイ……5
三　中ソ対立の影……7
四　流動するアジアと日本の役割り……9

〈討　議〉

・西沙群島をめぐる中国・ハノイの確執……13
・政治ぬきの商売への指向……14
・ゲリラ活動の蔓延と中ソ対立……15

一　噴出する地域問題

九月の初め、インドシナ戦後の状況の中で最も注目されるマレー半島を訪れ、シンガポールからバンコクまでは一週間かけて汽車を乗り継いで旅行した（昨年は、フィリピンからボルネオ、サバのあたりを調査）。東南アジア海域はこの夏、いろいろな問題と事件が起こっている。ミンダナオの回教徒の反乱、それから、新聞ではあまり大きく扱われなかったが、マレーシアではムスタファというサバの州政府首席が反逆した。結局その反逆はラザク政権に抑えられた形で、彼は名誉主席にたな上げされて一応収まったが、かなりの話題を呼んだ。チモールでは内戦が一応収まったかに見えるが、現在まで問題は解決していない。

マレーシアでは、クアラルンプールの市内にまでゲリラが出ている。今回マレーシアは、タイとの近くのケダ州のバタワース、それから華僑の調査に絶好の町であるイポー（ペラ州）などに行ったが、私が行っている間毎日のように新しい戒厳令が出ており、現地のローカル紙あるいは「南洋商報」「ニュー・ストレート・タイムズ」は、毎日のようにゲリラの掃討作戦と戒厳令の

問題を取り上げていた。

それから、タイ南部でいま非常にゲリラが活発化している。もう一つは、東北タイ（正確には東部タイと北部タイ）も同様の状況である。一方、シアヌークが五年半ぶりにプノンペンに帰った。これらの動きをざっと見ていると、やはりそこに何か一つの連関があるような気がする。

御承知のように、フィリピンのミンダナオ島からスールー諸島にかけては、サバと並んで従来マレーシアから離反する動きがあった。それにインドネシアの政策も絡んで、まさにこのムスタファのねらいというものは、この一帯に回教の新しい海洋連邦をつくりたいということであった。加えて今回のチモールの問題等々は、一口に言うと、インドシナ戦後のアジアの国際秩序未形成の状況に内在するローカルなあるいはリージョナルな問題が、一挙に噴出してきているような気がする。そしてこれらの問題は、今後のアジアの国際政治の枠組みの形成過程の中で、やはりかなりの影響を与えていくのではあるまいか。

その中で注目されることは、一つは中ソ対立というものがこういう状況の中でどういうふうに問題を複雑にしているかということがあるし、もう一つはいわゆる中国の影（シャドー・オブ・チャイナ）に対してアジア諸国がどういうふうに対応しようとしているか、さらにそれとの関連

で反政府武装ゲリラ勢力がどのような動きを示すかという問題があるであろう。

この一帯は、まさにソバレンティというものが考えられないような状況にある。去年ボルネオに行ったときも感じたことであるが、ほとんどこの一帯は海伝いに続いている。船はしょっちゅう夜陰に乗じて往来している。実際に私の友人で船に乗ってみせてくれた人もいたが、国境はあってなきがごとしという状況である。同じような状況は、タイとマレーシアの国境一帯についても言える。私は、今回汽車を乗り継いでジャングルを見詰め臨場感を味わいながら見てきたが、なるほどと思われる状況があった。

二　対中国政策

①　シンガポール

中国問題であるが、御承知のように、ＡＳＥＡＮ諸国は昨年五月のマレーシアを契機に、ことしのフィリピン、タイと相次いで中国との国交を樹立した。したがって、たとえばシンガポール

あたりはこの問題でかなり孤立感を味わっているのではないか、あるいはあせっているのではないかというふうにみていたが、それは全く逆で、私はリ・カンユーのブレーンの人にも会って一晩語り合ったが、今日のシンガポールはインドネシアとどちらが対中国交樹立のテールエンドになるかということにかけようとしているぐらいで、この問題では非常にクールな対応をしている。したがって内心では、マレーシアもタイもフィリピンも対中国交を実現したにもかかわらずむしろ国内治安面では毛沢東型のゲリラ勢力が伸びているではないかという感じを持って事態を見詰めているようである。

② マレーシア

これに対しマレーシアであるが、ここにはもともと「複合国家」としてマレー人と中国人とのレーシズムの対立がある。そういう状況の中でラザク政権にとって非常に頭が痛いのは、現在マレーシアのマレー化政策のもとで華人が非常に押さえつけられているわけであるが、その華人の間に反ラザクのムードがあることである。ラザクは北京と国交を正常化したが、そのことによってもうまくいっていないではないかという批判が実は華人の側からある。

なぜ華人側がそういうことを言い出すかということをいろいろ調べてみたが、マレーシアの華人はいま行き場がなくなっている。マレー化政策がどんどん進む一方、言語によって類型化できないような、つまり「嗄々（ババ）」（baba）あるいは「僑生」と言われる中国人でありながら中国語が話せない世代がだんだん出てくる。しかも、中国のメンタリティや文化的な伝統を失いたくないという苦悩の中で、もしもマレーシアのゲリラ勢力がこれ以上活発化すると――つまりＭＣＰは例のチンペイに代表されるようにほとんどが中国人でありこれが反中国人暴動、六九年のような凄惨な人種暴動につながりはしないだろうか。そうなったらもうわれわれにとっては出口はないという非常に暗い見通しがあるようで、このことがラザク政権に対する批判につながっている。このことは、ラザクにとっては思いも寄らないことではなかったかと思う。

③　タ　　イ

ところが、タイに来るとまた状況が急激に変わってくる。現在タイでは特にゲリラ勢力が非常に強く、治安当局のこれはそのまま発表されては困ると言う暗殺とかキッドナッピングがいかに増大しているかという統計をもらってきたが、そういうものを見ても非常に問題は複雑である。し

かし、やはりエスニックなオリジンからしてもタイ人の血の中には中国というものがあるわけで、いままで中国がタブーであり禁断の国であったのが、国交樹立後の一種のブームの中にそれがあらわれているような気がする。

私は考えるのに、タイにとって中国との国交正常化というものは、長い間禁じられていたものが初めて解かれたという意味で、明治開国の日本に似たような雰囲気で、したがって現在のタイにとっては、毛沢東中国は非常に目ざましい躍進途上の中国でなければいけない。バンコクの町の中には、ククリットと毛沢東の非常に若々しい大きな肖像がかかっているというような、従来のタイでは考えられないような変化がある。

もちろん、そのようなタイにおいてもいわゆる民主主義というものがかなりの問題を起こしていて、左右両翼からククリット民主主義に対する批判はあるし、ある意味ではノー・モア・デモクラシーという状況が出現しないとも限らない。そして、一方にゲリラ勢力の問題がある。

ただ、タイにとってやはり一番の問題は、チュラロンコン大学でククリットについて北京に行った中国学者としゃべっていてつくづく感じたが、ハノイの脅威である。まさにこのインドシナで最大の軍事力を持った革命インドシナというものができた。軍事力の格差は一対七という状

況の中で、ハノイの脅威があればこそやはり北京とはもっともっと親密化したいという気持ちが、恐らくタイの対中国交樹立の背景にはあったと思う。

そして、中国と国交を樹立すればハノイとの間もうまくいくであろう、従来アメリカの基地を置いていたことを忘れて、そういう虫のいいことを考えた。ところが、御承知のように、ハノイと北京の間にはいますき間風が吹いていて、タイが中国と親近化すればするほどハノイは非常に冷たくなっていく。一時伝えられた国交交渉も途絶しているのが現状で、これはタイにとっては期待外れだったであろう。

三　中ソ対立の影

こういう状況の中で、アジアにおける中ソの問題は大きな変化が生じている。つまりソ連の非常にアグレッシブな進出という状況がある。たとえばタイでは、新聞が伝えているように、KGBその他が非常に活躍している。具体的にチェンマイ大学とかタマサート大学あたりにはかなり

のソ連人が入っているし、去年の十月革命のリーダーたちが次々にモスクワに招かれている。

いわゆる親中ムードがあるだけに、ソ連の対中構想の一つのあらわれということができ、それらのことがどこに行っても目立っている。たとえばインド洋に面したところにペナントという香港に似た保養地があるが、ここなどでも二晩いる間にソ連の大きな船が入っているのが見られた。もちろんシンガポール、香港など至るところにソ連船が入っているわけで、これを華字紙などは単なる貨物船ではないと批判していた。

チモールの反乱については、新聞にはまだはっきり出ていないが、非常にうがった見方として、例の即時革命派は毛沢東主義者が主流を占め、民主同盟はポルトガル共産党の影響を受けているといわれる。ポルトガル共産党はソ連共産党と非常に近いわけで、この南太平洋の一角での紛争にさえも中ソ対立の影がある。それがうがち過ぎであったとしても、もしも事態が変化すればそういう状況があり得ることは疑えないような要因がある。それがある意味でソ連が今日の東南アジアの最もアグレッシブな攪乱要因ではないかということを、いろいろなところで見てきた。

ラオス特に南部はほとんどソ連の影響下にある。メコン川にはソ連製の哨戒艇が入っているし、ビエンチャンなどではもう外国人と見ればすべてロシア人であるというような状況がある。この

ことは、同時にこのインドシナ半島に非常に複雑な問題をもたらすような気がする。たとえば西沙群島である（いまはベトナムの上空を通らずここを通るが、飛行機の上から非常にきれいなサンゴ礁の群島が見える）、ここにもハノイは正規軍を出している。このことは、北京にとっては大変なことであろう。

こういうハノイとソ連、カンボジアと北京の関係の中で一種の国際ゲームが展開されると言うのはやや単純過ぎるが（もちろんクメール・ルージュの中にもソ連派もハノイ派もあると思う）、とにかくそういう非常に複雑な状況の中で、中ソ対立というものが思わぬ影響をもたらしてきている。そこには、単にアジア集団安保というようなきれいごとでは済まないようなソ連の対応があるような気がする。

四　流動化するアジアと日本の役割り

そういう状況の中である意味では日本に対するイメージが非常によくなっている。二年前の

「反日論」が吹き荒れた状況とは全く異なって、いまや日本はアジアの中でまさに安定要因になりつつあるような気がする。この間、民社党の春日さんが行ったときに、タイのチャチャイ外相は日本から武器を買いたいと言ったと日本の新聞にも出ていたが、これは従来考えられなかったことである。これは、自民党の政治家や政府レベルにはやはり言えないが相手が民社党だから言えたことで、タイにとってはやはり本音であろう。

今回はハノイには行かなかったが、バンコクでハノイに入ったある日本商社員と一晩話した。彼がいうのには、ハノイは日本から物を買いたがっているとの話である。もうこれ以上ソ連の世話にはなりたがっていない。なぜなら、サイゴン陥落まではソ連の軍事援助が必要だったが、これからは日本から物を買いたい、ましてや中国からはわれわれは買いたくないと言っていたと。日本はコマーシャルベースで売ってくれるから日本から買いたいと言っていたそうだが、これも本音だろうと思う。このことにあらわれているように、日本はいま東南アジアの再編成の過程の中である意味で一つの非常に重要な役割りを担いつつある。

アジア自体は非常に状況が流動的であり、具体的にタイがどうなるか、マレーシアがどうなるかはハノイのインテンションにかかっていると思う。この辺の事情についてある華字紙の記者は、

いまラザク政権に抑えられている中国人は何も書けないといっていたが、実際に武器はもう国境を越えて入っている。警察官を襲った銃がアメリカ製であったという話を現地新聞で読んだが、これはベトナムから入っているのだという説もある。

東北タイ・ゲリラは中国の影響下にあったが、少なくとも東タイはハノイの影響下にあるということが言われており、果たしてハノイが今後どう出るかによってマレー半島の将来は非常に大きく左右される。ただ、今後ハノイは南北統一と国土の再建という問題を抱えているし、果たしてハノイがそれほどまでにアグレッシブであり得るかということを考えると、ハノイの指導者はもっと賢明であるような気もする。ただ、そういうわりあいリスキーな状況の中において、日本が果たすべき役割りは非常に増大していることがはっきりいえる。

〈討議〉

〈西沙群島をめぐる中国・ハノイの確執〉

D　ハノイは西沙群島に軍隊を送ったんですか。

H　送ったらしいですね。もちろん西沙群島というのは幾つかのサンゴ礁の群島で、中国側の方は中国が押さえ、サイゴン側の方をサイゴンが押さえているわけで、その地域に送ったわけです。しかし、中国は全部が自分のものだと、もっと南の南沙群島まで自分のものだと言っているわけですから、これは北京にとっては大変なことじゃないでしょうか。

D　この間、ホワイティングが日本に来たときに言っていたけれども、中国は教科書なんかで帝国主義の一番新しい事例として西沙群島の例を挙げていたわけで、これがいまベトナムとの間で問題になるとお互いに困るだろう。

H　いまは中国としてもハノイの戦勝をたたえているときですから、この問題で文句も言えず黙っているんでしょうが、内心は非常に中国としては怒っているでしょうね。

I　回られた範囲で、経済状況は非常に悪かったですか。

H　それほどとは思いませんでしたけれども。

〈政治ぬきの商売への指向〉

I　いわゆる石油ショックなるものの二次的な負担はどうなんですか。

H　それはこの間のようなことは別ですが、マレーシアなんかは今後石油がかなり出ることに期待を持っているようですね。

I　インフレなんかが特に悪くなっているということはないですか。

H　いや、それはどこでも悪くなっているとは言っております。

B　いま言われた日本の役割りが増大するということは、要するにいろいろ複雑にからみ合っているのでどっちにも物を売ってくれと…。

H　まあそういうことでしょうね。そういう意味では、日本にとっては大いに結構なことかもしれないという気がします。

B　そうすると、日本の中も少しばらばらになっていないと、あまりまとまって両方に売るというわけにもいかないでしょう。

X　日本から買いたいとおっしゃったけれども、日本に売りたいという欲望も非常に強いんじゃないですか。

H　そうかもしれませんね。

D　簡単に言えば、政治抜きの商売がしたいんだ。ほかは全部政治がからみ合っているから。だから、いいんじゃない。版図が分かれていたら困るけれども、一つにまとまってくれれば共産主義だろうがファシズムだろうが何でもいい。

B　それならそれでいいけれども、まとまりそうもないわけでしょう。

D　そうなんだ。それが困るんだ。

〈ゲリラ活動の蔓延と中ソ対立〉

B　さっきのフィリピンの話でちょっと気になったけれども、相手は赤軍とか何とかじゃなくて反政府ゲリラでしょう。反政府ゲリラに人命尊重とはいえ日本が金を出すということは、そっちの勢力を助けることになるからフィリピン政府としてはいやですね。だから、それだったらフィリピン政府にも同じぐらいの金をくれという要求をしたっていいわけだ。

I　それぐらいの交渉はあるんじゃないか。軍艦など出していやがらせしたのは、多少その気味があるんじゃないかと思うんです。

D　しかし、アフリカのことからいえば、こういうあっちでゲリラこっちでゲリラという状況は不思議で

はないね。全部でないけれども、すごいらしい。そういう反乱が起こると、必ず毛沢東派とソ連派と土着派が出てきて、始末に負えんそうです。チモールがポルトガルか何かで、毛沢東派でしょう。

H　ということがかなり言われてますね。それは意外にあり得ると思うんです。マカオの総督が中国派で、その総督の下にいた役人がポルトガル共産党なんです。最近解任されたけれども。

I　おまけにあすこにはインドネシアの勢力も入っているでしょう。

H　チモールはね。